

# 幼児教育における「連携・協働」する力を育む 実践の検討

中村 真緒・梶 美保・吉田直樹

**要旨：**本研究の目的は、幼児教育における「連携・協働」する力の育成について考察することである。「連携・協働」する力については、従来にも増して社会の一員として、また専門職の質向上のために必要不可欠な力であり、養成校として取り組むべき重要項目である。そこで、少人数教育であるゼミと課外活動における取組みの実践を検討した。その結果、ゼミにおける実践では、チームによる学内外での保育・子育て支援活動により、授業や実習では学ぶことができない学生間の人間関係力が培われていることが示唆された。また、課外活動実践では、初回に比べ実践を重ねるごとに、学生間での「連携・協働」への意識の高まりがみられた。今後は養成校として、授業間の連携のものと実践や課外活動を通して「連携・協働」することの大切さを実感させるとともに、幼児保育・子育て支援の在り方を検討していきたい。

**キーワード：**幼児教育 保育者養成 連携・協働

## I. 研究の背景・目的

「連携・協働」とは何か。「連携」とは、互いに連絡を取り協力して物事を行うことであり、「協働」とは、同じ目的のために、対等の立場で協働して共に働くことである（デジタル大辞泉）。「連携・協働」する力はなぜ必要か。少子化にもかかわらず、子どもを取り巻く状況は多様・複雑化し、特に子育てについては少子化社会対策基本法（平成15年（2003年）法律第133号）第7条の規定に基づく「大綱」として定められた「子育てビジョン」（2010）以降、家庭で保護者の責任のもとで行うものから社会全体で多様なネットワークで支えるものとなってきており、そのための社会の体制づくりが進んできている。昨今改定（改訂）された保育所保育指針・幼稚園教育要領等（2017）においても、保護者、家庭、地域との連携や協働を重視することが求められ、保育内容の充実や、健康と安全の保持など、個人や個々の園だけでは取り組んでいくことには言外があり、保育者間、専門職間、保護者、地域、専門機関等が連携・協働してという文言となっている。

国が求める人づくりの観点では、2006年に経済産業省が「人生100年時代」と「第4次産業革命」

を念頭に提唱した社会人基礎力がある。この社会人基礎力は、3つの能力と12の能力要素で構成され、その能力の1つが「チームで働く力」であり、これは協調性だけにとどまらず、多様な人々とのつながりや協働を生み出す力とし、その上に専門スキルがあるものと提唱している（図1・図2）。2017年には、従来の3つの能力と12の能力要素に、さらに「3つの視点」を加え、新たに「人生100年時代の社会人基礎力」を打ち出している。

小学校・中学校・高等学校の学習指導要領、幼児教育・保育における保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改定（改訂）は、まさにキャリア形成上重要性が増しているこの日本における人材育成の方向性と一致している。

保育所保育指針や幼稚園教育要領は、その社会的な背景により改定（改訂）されてきている。保育所保育指針を例にみてみよう。保育所保育指針は、1965（昭和40）年に制定されて以後、1990（平成2）年、1999（平成11）年、2008（平成20）年、2017（平成29）年と4回の改定がされている。その改正の趣旨・方向性については、表1のとおりである。「連携」あるいは「協働」という文言が目次項目として初出するのが1990（平成2）の保

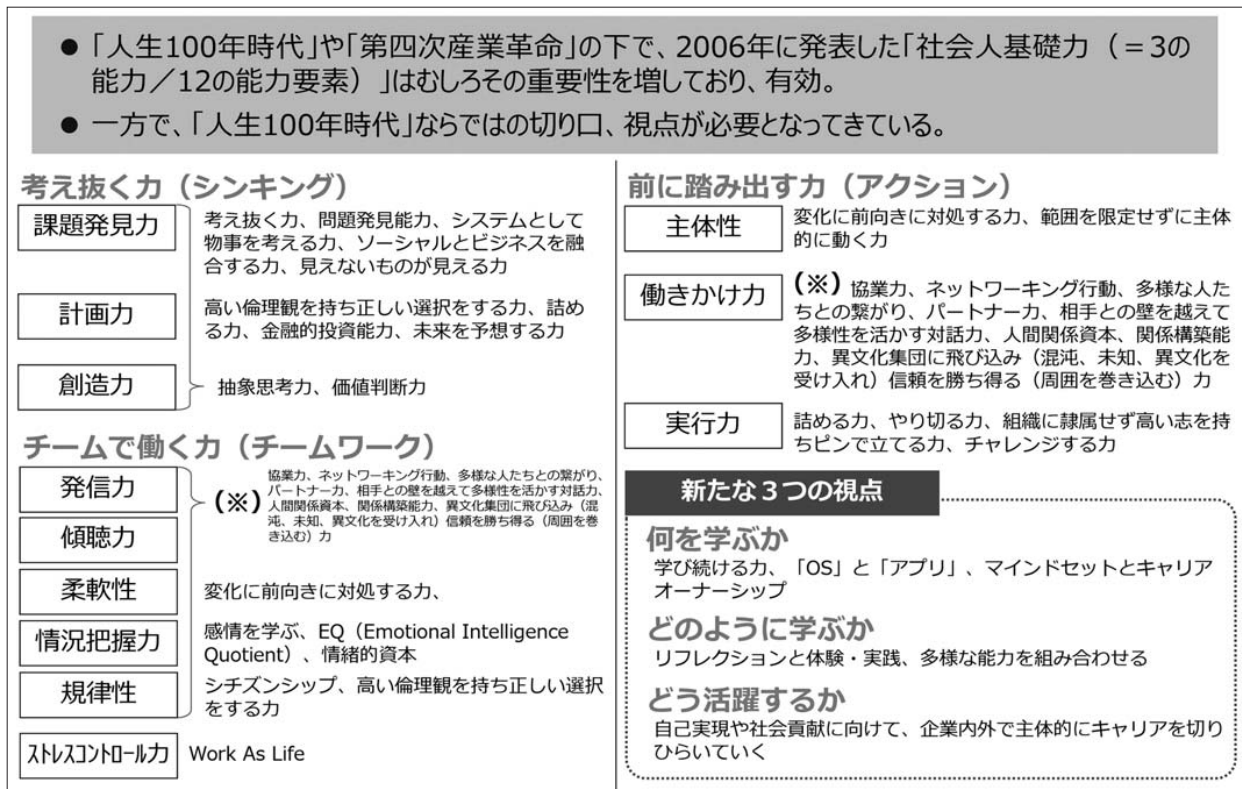


図1 経済産業省「3つの能力/12の能力要素」 出所）経済産業省 HP

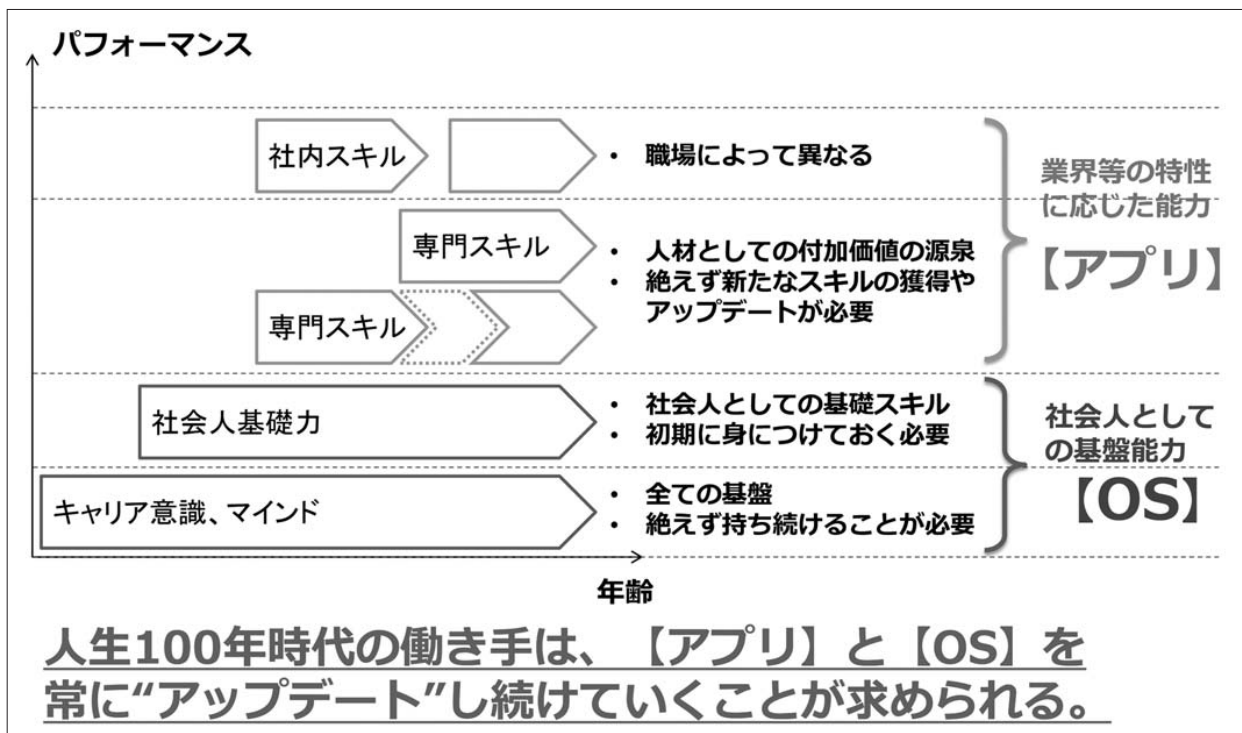


図2 人生100年時代に求められるスキル 出所）経済産業省 HP

育所保育指針であり、このとき社会の動きは、少子化対策として保育所の充実（エンゼルプラン）がうたわれ、子育て支援施策がいっきに拡充した時代である。保育所機能が拡大していくにつれ

て、保育の質の向上や、安全の確保のための全職員の組織の実施体制がだんだん重要となってくる。また、多様なニーズにこたえていくためにも保育所だけではなく、地域との連携や専門機関と

表 1 保育所保育指針の改定の方角性

改定年	改定の方角性、改定内容等	社会の動き等
1965 (昭和40)	<b>11章構成</b> 保育の内容(昭和23年児童福祉施設最低基準)の充実のため厚生省よりガイドラインとして刊行4歳以上の教育は幼稚園教育要領と同じ6領域	1977(昭和52)年 男性保育者認可
1990 (平成2)	<b>12章構成</b> 保育内容が6領域から5領域へ、幼稚園と保育内容を統一化、乳児保育の区分細分化 障害児保育 保育所の養護的機能(生命の保持・情緒の探偵にかかわる事項:基礎的事項)を明確化 保育の計画 家庭、地域との連携	1.57ショック 少子化対策(子育て支援) 1994(平成6)年エンゼルプラン 保育サービスの拡充
1999 (平成11)	<b>13章構成</b> 子育て支援、職員の研修	保育所 措置→利用
2008 (平成20)	<b>7章構成</b> 大臣告示化 スリム化 保育所保育指針解説書 発達過程 保護者に対する支援	2003(平成15)保育士資格法制化 2010(平成22)子ども・子育てビジョン 社会全体で子育てを支える
2017 (平成29)	<b>7章構成</b> 「資質・能力」「就学前に育つ10の姿」 幼稚園教育要領・認定こども園教育・保育要領との内容の整合化	2015(平成27)年子ども・子育て支援新制度

の連携が不可欠な時代となった。もちろん保育の質を上げるためには、保護者との連携が欠かせない。

西川・堀田(2019)は、教育・保育者を目指す大学生の汎用的能力は他業種と比べ「低リテラシー・高コンピテンシー」という特徴があるとし、優先的に備える力についてリテラシー「課題発見力」、コンピテンシーについては「協働力、行動持続力」下位要素の育成が当該業種の職業興味や自信を高める可能性を示唆している。

また、「連携・協働」する力が「専門スキル」の基盤であるというならば、卒業後ではなく保育者養成校において取り組むべき必要性があるのではないだろうか。またそれが保育の質向上につながっていくものであると考える。以上の背景からどのように「幼児教育における連携・協働する力」を育成していくことができるのか、について本校の授業実践と評価と課外活動実践から検討する。

## Ⅱ.「連携・協働」する力を育む授業実践

### 1. 研究目的・研究方法

研究目的は、「連携・協働」する力を育成するゼミ授業の構築を行うことである。期間は2018・

2019年度で、対象は本校教育学部教育学科梶ゼミ25名、内容は①子育て支援活動実践、②子育て支援活動実践の評価(活動レポート、アンケート)である。アンケート実施期間は、2019年12月19日～20日である。

### 2. 結果と考察

ゼミの概要:「小児保健・保育学ゼミ」である。保育実践力育成のために積極的に学外へ外向き、保育・子育て支援活動を実践している。全員が幼児教育コースの学生である。例年、3・4年ゼミ(教育研究演習Ⅰ・Ⅱ)であったが、2019年度秋学期より2年生ゼミ(教育研究基礎演習Ⅲ)がゼミとして加わる。

学外における子育て支援活動に対する目標は、2年生では、主体的に活動に参加し、子ども理解やとりまく社会について理解を深める。保育技術の習得。メンバーシップが取れる。3年生では、リーダー、サブリーダーを経験し、他団体等と連携し企画・運営・実践の流れに沿って活動できる。4年生では3年生と同様及びオブザーバーとして助言・評価できるとし、活動後は振り返りレポートを課している。



表2 授業の流れ

時 期	項 目	内 容
4 月	・ パソコン基本演習 ・ 学内保育技術の計画 ・ 学外子育て支援企画作成演習	・ 企画書づくりに必要なパソコンスキル、SNS をパソコンで利用、メールや SNS をゼミで活用するときのルール、 ・ プリンタ活用法など。
5 月～6 月	・ 保育技術演習	・ 絵本の読み聞かせ、ペープサート、パネルシアター、手袋シアター、ふれあい遊び、紙芝居、スライム、紙皿シアターなどの学び（担当がレジュメをまとめ講義、必要に応じて演習、 ・ 手袋シアター作成、ペープサート作成。
7 月～3 月	・ 保育技術演習 ・ 学外活動の企画準備と実践 ・ 10月より2年生ゼミ参加	・ 大型絵本作成、バルーン講習など。 ・ 企画書作成、準備、練習、実践、振り返り、レポート提出

## 結果①授業実践（表2）

4 月は、活動に必要なネットワーク及びパソコン基本演習（ワード・エクセル・パワーポイント等）演習、メール及び SNS の活用法等、学生が主体的に行う学内における保育技術の計画作成、子育て支援活動の企画作成演習などを実施した。5 月、6 月は、保育技術演習（絵本、各種シアター等）を中心に行う。2018年度は、学内外で27回の活動（表3）、2019年度は、20回の活動（表4）を実施した。学外活動でリーダー・サブリーダーは、先方の自治体及び団体（保育所等）担当者と連絡を取り企画書（表5）を作成し、それをもとに準備等を進める（図3）。リーダー・サブリーダーは、毎回交替し、経験者が次のリーダー・サブリーダーに役割等を引き継いでいく。水曜日（および休日）を原則活動日としている。活動の種類により全員あるいは異学年のグループで活動し、同級生間、異学年間による学び合いや協働、子育て支援・地域活動実践による先方とのかわりを通して連携・協働力の育成を目指している。

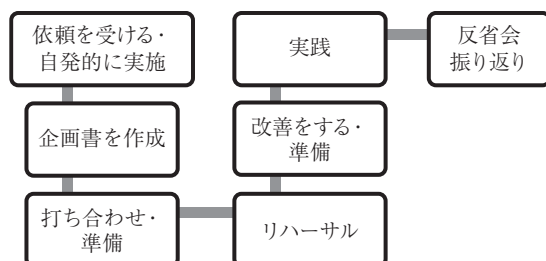


図3 活動の手順

## 結果②-1：アンケート結果

回答率100%（25名）、ゼミとしての保育・子育て支援活動に参加したものは、平均2年生4.7回、3年生16.0回、4年生16.2回であった。その中で2年生を除く3年生、4年生すべてがチームリーダー・サブリーダーとしての役割を経験していた。

直近の学外活動における学びについての質問では、「メンバーと協力して活動できた」がどの学年も「そう思う」が高く、学年間の点数の開きが高かった項目は、「遊びのブースで臨機応変に対応できるようになった」「常に安全に配慮して活動することができるようになった」であった。

また2年生は、「地域の子育て支援の必要性が理解できた」「活動した地域に関心を持つことができた」の項目が「そう思う」が高かった。

「連携・協働」について、「学びがあった」ものは、56.0%（14名）であり、「わからない」が40.0%（10名）、無回答4.0%（1名）であった。学びの内容は、「様々な意見を出し合うこと」「話し合いの大切さ」「学生間での学びがあった」など14件、「先輩からの学び」「異学年での学び」11件、「地域の子どもの姿」「団体との連携の仕方」「地域での学び」など5件の記述があった。

「連携・協働」について困ったことでは、「情報共有が難しかった」「練習や準備等の時間がうまく取れなかった」など11件の記述があった。「連携・協働」力について個人の課題では、「企画の重要性」「情報の共有」「リーダーシップ力を高める必要性」など21件の記述があった。

表 3 2018年度の学内外の活動

	月 日	曜	時 間	活動場所	活動内容	備考
1	4月11日	水	13:30～16:30	本学 保育実習室	・子育て支援活動支援者のためのバルーン講習	7名参加・梶
2	4月25日	水	10:30～11:00	市内保育園子育て支援センター	・子育て支援プログラムの実施	10名参加・梶
3	5月16日	水	10:00～10:30	市内子育て支援センター	・子育て支援プログラムの実施	10名参加・梶
4	6月29日	金	9:30～12:40	本学 保育実習室	・バルーンアート講座	10名参加・梶
5	7月8日	日	10:00～12:00	市内 イベントホール	・パパの育児力 up 講座 & ママのためのヒーリングタイム	15名参加・梶
6	7月13日	金	9:30～12:40	本学 保育実習室	・子育て支援活動支援者のためのバルーン講習	6名参加・梶
7	7月25日	水	10:00～10:30	市内 子育て支援センター	・子育て支援プログラム	16名参加・梶
8	7月28日	土	9:00～11:00	県内結婚式場	ゼミ先輩結婚式会場装飾	3名参加・梶
9	7月22日	土	14:00～18:00	市外 公園	・夢が丘自治会夏祭り参加	6名参加・梶
10	8月4日	土	15:00～19:00	市外 保育園夏祭り	・夏祭りブース参加 環境構成バルーン配布	5名参加・梶
11	8月15日	水	16:00～17:00	市内	・伊勢市男女共同参画「パートナーの日」イベント会場バルーン装飾	2名参加・梶
12	8月20日	月	18:30～20:00	県内大学附属病院ホール	・小児科病棟夏祭り ブース参加 ハンドマッサージとゲーム等	8名参加・梶
13	10月1日	月	9:00～11:00	県外 子育て支援センター	開設イベント バルーンのオブジェ	1名参加・梶
14	10月8日	月	10:00～15:00	市外 イベントホール	・ブース参加 ・会場バルーン装飾	3名参加・梶
15	10月17日	水	10:30～11:00	市内 子育て支援センター	・子育て支援プログラム	11名参加・梶
16	10月21日	日	10:00～12:00	本学保育実習室	・パパと赤ちゃんのためのベビーマッサージとふれあい遊び	8名参加・梶
17	11月14日	水	10:30～11:00	市内子育て支援センター	・子育て支援プログラム実施	9名参加・教員
18	11月18日	日	9:30～15:00	市内町内会祭り	・自治会祭り 会場装飾 ブース参加	5名参加
19	11月21日	水	10:00～11:00	市外子育て支援センター	・託児	6名参加・梶
20	12月12日	水	10:00～11:00	市外子育て支援センター	・子育て支援プログラムの実施	6名参加・梶
21	12月12日	水	15:00～16:30	市内	・映画上映会会場装飾用クリスマスオブジェの作成	9名参加・梶
22	12月18日	火	11:00～12:00	本学 保育実習室	・子育て支援活動支援者のためのバルーン講習	12名参加・梶
23	1月19日	土	9:00～14:00	市外 認定こども園	・こどもフェスタブースバルーンアート参加	5名参加
24	2月10日	日	10:00～14:00	市内 催事場	・レインボーフェスタブース参加 オブジェとバルーンアート配布	8名参加
25	3月17日	日	13:00～16:30	本学	・研修会運営スタッフ	8名参加・梶
26	3月20日	水	10:00～11:30	市外児童館	・子育て支援プログラムの実施	6名参加・梶
27	3月24日	日	10:00～11:30	市内中学校	・子ども学びプロジェクト運営補助スタッフ	6名参加・梶

表4 2019年度の学内外の活動

	月 日	曜	時 間	活動場所	活動内容	備考
1	6月29日 30日	土 日	10:00～16:00	本学 市外 総合会館	・県内における地域子育て支援拠点施設（基礎研修）担当者研修会	4名参加・梶
2	7月5日	金	10:00～12:00	市外認定こども園	・出前講座（0歳～5歳児）	18名参加・梶
3	7月10日	水	10:30～11:00	市内子育て支援センター	・子育て支援プログラム	12名参加・梶
4	7月10日	水	13:30～15:00	本学	・初年次学生への保育実践紹介	6名4年・梶
5	7月12日	金	17:00～19:00	市外認定こども園	・夏祭り（バルーン配布）	2名参加・梶
6	7月14日	日	10:00～12:00	市内 催事場	・パパの育児力 up 講座 （ベビーマッサージとふれあい遊び）	7名参加・梶
7	7月23日	火	10:00～11:00	市外子育て支援センター	・ベビーマッサージとふれあい遊び	6名参加・梶
8	7月24日	水	13:30～15:00	本学	・初年次学生への保育実践紹介	12名3年・梶
9	7月24日	水	16:30～18:00	県内短期大学	・保育技術共同練習会	3名3年生・梶
10	8月20日	火	18:30～20:00	県内大学附属病院ホール	・小児科病棟夏祭り ブース参加 ハンドマッサージとゲーム等	7名参加・梶・
11	9月14日・ 15日	土 日	8:00～ 翌日18:00	県内青年自然の家	・小児がんキャンプ	9名参加・梶
12	10月23日	水	10:30～11:00	市内子育て支援センター	・子育て支援プログラム	12名参加・梶
13	11月17日	日	9:30～15:00	市内町内会祭り	・自治会祭り 会場装飾 ブース参加	6名参加
14	10月29日	火	11:00～13:00	市内子育て支援センター	・バルーン環境構成	16名参加・梶
15	11月13日	水	10:00～11:00	市外子育て支援センタ	・子育て支援プログラムの実施	19名参加・梶
16	12月4日	水	10:00～11:00	市外認定こども園	・子育て支援プログラムの実施	19名参加・梶
17	12月7日	土	8:30～18:30	県内国際学会	・託児	2名
17	12月8日	日	8:30～18:30	県内国際学会	・託児	3名・梶
18	12月18日	水	10:30～11:00	市内子育て支援センター	・子育て支援プログラムの実施	7名参加・梶
19	2月1日	日 水	10:00～15:00	市外認定こども園	・こどもフェスタブースバルーンア ート参加	7名参加
20	2月21日	金	14:00～16:00	市外 公民館	・バルーン講習	12名参加・梶

## 結果②-2：活動レポート

学生の学びとしての側面では、以下の7つのカテゴリに分類できた。①対象理解の深まり：ふれあい遊びなどの対面による活動を通して、参加している親子と直接かかわることができることにより、子どもの姿、保護者の姿を知ることができる。②保育者の役割、親子への対応：保育士や他の子育て支援者が子どもや保護者と対応している姿を実際に見ることで、子どもとの接し方などを学ぶことができる。③保育表現技術・企画力のスキルアップ：パネルシアターやエプロンシアターなどの保育表現技術の実践をすることで、企画・製作技術の習得、また実践を通して年齢や対象に応じた指導力について経験する機会ともなった。また、会場設営を体験することで、親子が安らぎ楽

しめる環境構成を考える機会ともなった。④子育て支援センターの役割・理解：子育て支援センターの実態や施設役割の理解を得ることができる。⑤子育て支援社会の理解、視野の拡大：県内外の地域の子育てフェスタに参画することで、地域の次世代育成支援対策の実態や子育て支援に携わる組織・団体の役割を学ぶことができる。⑥連携する力：これらを学内活動において企画していく過程では、学生間交流による主体的成長が見られた。⑦活動の意義とフィードバック：活動報告会で活動全体を包括的にみて総括することで活動の意義、学びを再確認することができた。



質の高い保育者養成のためには、幼児教育・保育の専門性や今特に必要とされる力量を意識して、各大学学科のDP（デュプロマポリシー）の

表5 企画書例

○企画書

市内子育て支援センター 企画（案）

文責 学生〇〇

活動日時	令和元年7月10日（水）10：30～11：00（9：15 大学8号館前集合）
活動場所	市内子育て支援センター （ 住所 電話 ）
主催	梶・学生11名（
活動のねらい 内容	市と連携した地域貢献（子育て支援） 地域子育て支援センター，親と子の理解，保育実践力の向上 劇（雨の日のさんぽ），パネルシアター（かえるさんが）
当日までの 準備日程	7月5日（金）4・5限目 製作（あじさい，太陽，虹，曇り空） 7月8日（月）1・3・4限目 練習（劇練習，パネルシアター） 7月9日（火）2・3・4限目 練習，（劇，パネルシアター） 準備（プレゼント用のクマ，歌詞カード作り）
当日の流れと役割 分担	<div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集合場所：大学8号館前集合 解散11：30頃</li> <li>・ 交通手段 バス（市によるマイクロバスの送迎）</li> <li>・ 行程 9：35 皇學館大学 出発 10：00 子育て支援センター 準備 10：30 劇，パネルシアター 開始</li> <li>(1) 劇（雨の日のさんぽ） 担当 背景補助</li> <li>(2) パネルシアター（かえるさんが）担当 プレゼント配布（クマ）全員配る</li> <li>11：00 終了 後片付け</li> </ul> </div> 
準備物	〈会場設営〉 ・ 2段オブジェ（2） 緑（16） ・カエルのバルーン（2） ・ 水おもり（2） ・ガムテープ（2） ・ビニール袋（2） 〈劇〉 歌詞カード（いないいないわお，雨が降ったらでかけよう30枚） 背景（あじさい，太陽，虹，曇り空） 〈パネルシアター〉 かえるさんがのPペーパー，衣装（各自）， キーボード（きらら館側の準備），イーゼル（きらら館側の準備） パネルシアターボード（きらら館の準備） 〈用意するもの〉 ・ゴミ袋（2）・イベントセット（各自） ・プレゼント用のクマ（30個程度作り，予備を持っていく）
備考	・ 動きやすい服装，ゼミTシャツ，髪は束ねる，爪は短く切る 連絡先 梶先生 携帯 リーダー〇〇 携帯 

方向性と大学の中の枠組みの中でのカリキュラムマネジメントが重要である。幼児教育における「連携・協働」力は、保育の質の向上のために、また施設だけでは抱えきれない多くの課題解決のために必要な力量である。今回、「連携・協働」力に焦点をあてて保育・子育て支援活動を振り返った。学外での活動からは学内で学ぶことがで

きない多くのことが学べ、3学年における「連携・協働」した活動からは、授業、実習では学ぶことができない学生間の人間関係力が培われていることが伺われた。今後はさらに科目間、教員間で連携を図りながら取り組まれた実践の積み重ねをしていきたい。



### Ⅲ. 「連携・協働」する力を育む課外活動

#### 1. 研究目的・研究方法

研究の背景で述べたように、保育士の専門スキルの基盤としてチームとして働く力が要求されていることから、保育者養成機関の課題として「連携・協働」する力の育成に着目した。本研究では、本学が課外活動実践として取り組んでいる子育て支援活動「ぴよぴよ」が、「連携・協働」する力の育成に与える効果について検討することを目的とした。

研究方法は、子育て支援活動「ぴよぴよ」において、2017年度から2018年度にかけて、2年間計4回の実践を継続した学生17名を対象に、各回実施後に提出された自由記述式のアンケートを樋口(2018)によるKH Coder 3 (Alpha.13m)を用いて、計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析 (content analysis) を行う方法 (樋口, 2014) である。KH Coder 3 では22品詞の形態素に分類されるが、そのうち名詞、サ変名詞、形容動詞、ナイ形容、副詞可能、動詞、形容詞、副詞、名詞B (Bは平仮名のみの語)、動詞B、形容詞B、副詞B、名詞C (Cは漢字一文字の語) のうち、分析対象ごとに最小出現数4以上の語を抽出しコレスポネンス分析を行った。

アンケートの質問項目は、「子どもの姿から学んだこと」「保護者の姿から学んだこと」「一緒に取り組んだ仲間から学んだこと」「教員から学んだこと」の4項目であった。



図4 保育実践の様子

子育て支援活動「ぴよぴよ」の概要：皇學館大学子育て支援活動「ぴよぴよ」は、学生が実践的に学ぶ場、保護者同士の交流の場として、2011年に発足し、2020年で9年目を迎えた。運営責任者は、幼児教育担当教員であり、さらに教育学部助手と子育て支援員2名(元私立幼稚園園長、元公立小学校教諭)が学生指導と保育実習室の管理・運営にあたる。参加対象は、未就園の乳幼児とその保護者で、1回あたりの参加組数は10組～20組が参加する。(参加した親子数：2017年度842人、2018年度740人)参加者は伊勢市民を中心とした、未就園児とその保護者で無料で参加することができる。活動は、本学の教育学科幼児教育コースの3・4年生が有志で行い、主担当3～4人、補助3～4人の計6～8人でチーム(連携)を組んで取り組み、それぞれのチームで、季節や年齢に合わせた企画を考え、保育実践に繋げていく(図4)。年間の開催日数は、実習・試験期間を除く24回前後で、毎週水曜日の10時～11時半まで行う(表6)。活動当日は朝の受入れ準備から始まり、親子を出迎えコミュニケーションを取りながら自由遊びを行う。そして、11時を目途に遊びを片付け、全体活動を行う。活動の内容は、手遊び、歌遊び、リズム遊び、パネルシアター、人形劇などを取り入れた“親子ふれあい遊び”“季節をテーマにした遊び”“行事(夏祭り、クリスマス会)に合わせた活動”などを題材に、担当学生が企画し実践する。活動終了後には、担当教員や支援員を含めた反省会を行い、実践を振り返りながら反省や成果を話し合い、今後の課題と改善の方向性などを明らかにする(図5)。



図5 反省会の様子



## 2. 結果と考察

「保護者の姿から学んだこと」への回答からは、図7に示したように、第1回では保護者が「自分の子どものことを話してくれる」というように、保護者からのアプローチが中心であったが、第2回では「保護者に関わっていくことでコミュニケーションの難しさ」を感じながらも、第3回では「話をする中で子どもへの接し方を学べる」ことに気付き、第4回目では「保護者との関わりあい」から「その子に応じた働きかけ知る」という体験をしている（図7）。

Frequency:

25

50

75

— 93 —

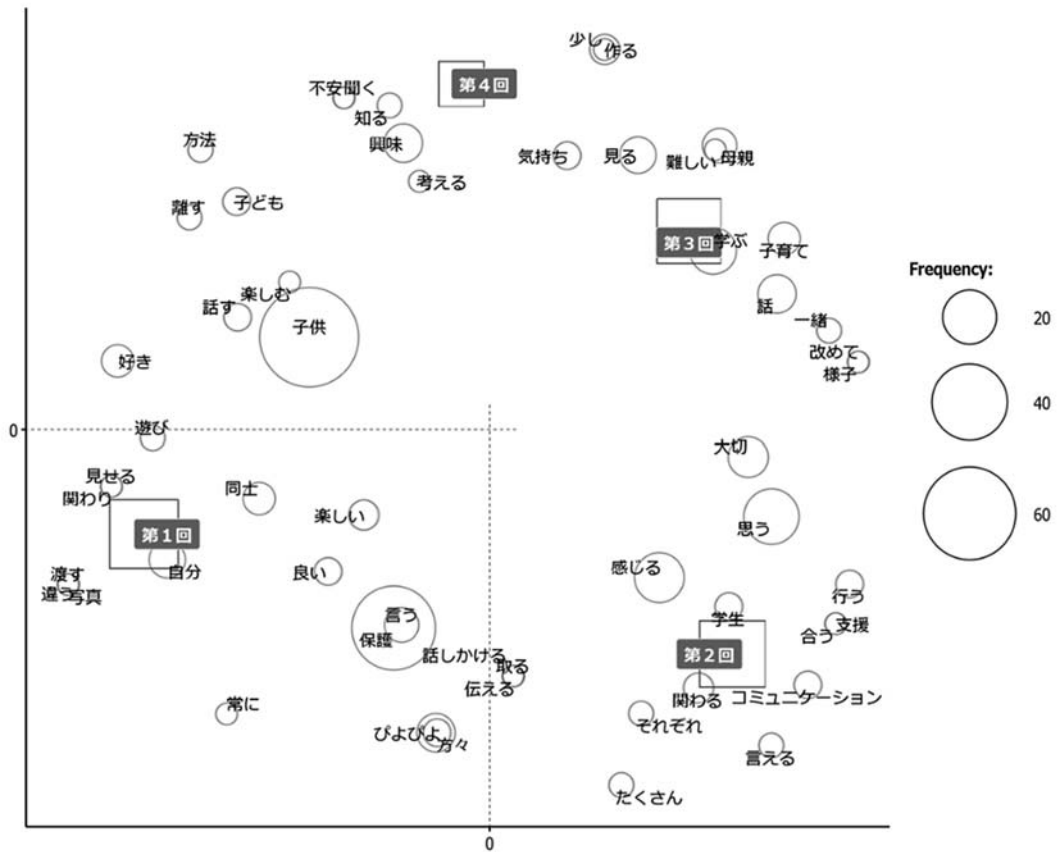


図7 「保護者の姿から学んだこと」の対応分析

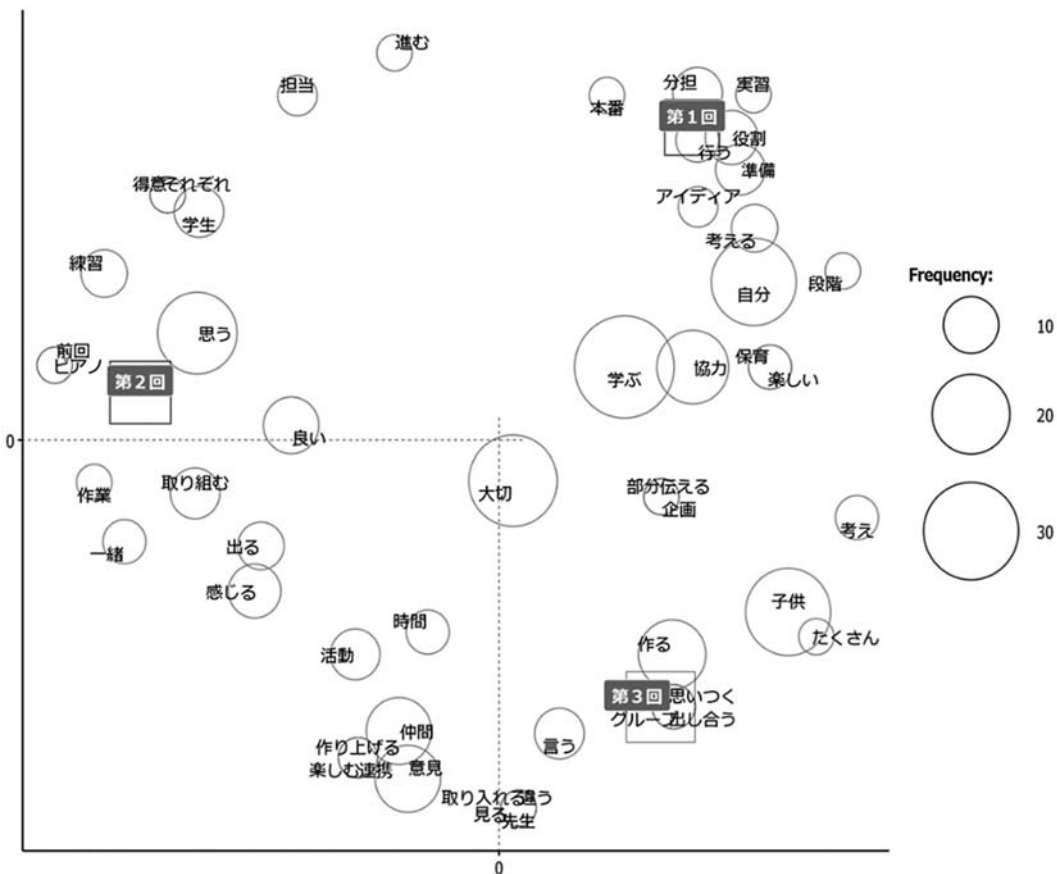


図8 「一緒に取り組んだ仲間から学んだこと」の対応分析

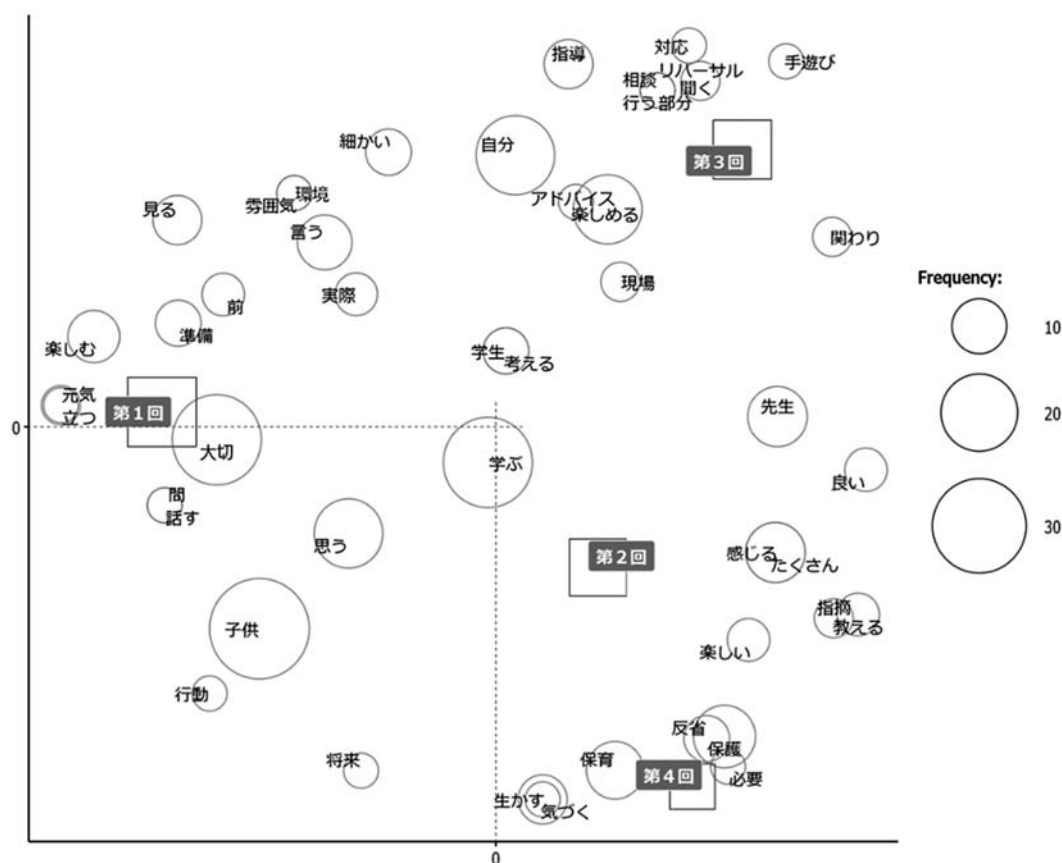


図9 「教員から学んだこと」の対応分析

「一緒に取り組んだ仲間から学んだこと」への回答からは、図8に示したように、第1回では仲間と協力することや役割分担・準備の大切さに気付き、第2回では前回の反省点を踏まえた取り組みができ、第3回では連携・協働の大切さを改めて実感できていた（図8）。

「教員から学んだこと」への回答からは、図9に示したように、準備や衛生管理・環境構成など運営面での必要事項を伝達し、リハーサルにおける評価やアドバイス、あるいは気づきや反省を促す機会など、受け身的な助言・指導の印象が強く、協働・連携とは対称的な双方向性に欠けたものとして認識されていることが見いだされた（図9）。

4項目各回のアンケートから抽出された特徴語上位10語を以下に示した（表7）。第1回の実践では子どもの姿と自分自身しか意識化されていないのに対し、第2回では一緒に取り組むことやコミュニケーションが大切なことを学び、第3回では仲間との協力の大切さを改めて考えるようになるなど、実践を重ねるごとに連携・協働が強まることが示唆された。

以上の結果から、学生は課外活動実践を重ねるごとに保育者同士の「連携・協働」に対する意識の変化がみられた。保育者養成校としてこれらの力を育むには、学生同士で作り上げる保育経験の必要性を大いに感じた。

表7 アンケートにおける特徴語

第1回		第2回	
子供	.296	思う	.242
自分	.250	大切	.225
保護	.165	感じる	.222
楽しむ	.137	学ぶ	.220
考える	.135	言う	.151
姿	.134	取り組む	.121
言う	.133	一緒	.119
見る	.126	持つ	.111
準備	.125	それぞれ	.108
遊び	.113	コミュニケーション	.108
第3回		第4回	
大切	.224	保育	.167
楽しい	.136	子供	.135
言う	.129	初めて	.125
見る	.122	真似	.107
声	.118	思う	.104
良い	.115	母親	.103
協力	.105	使う	.100
仲間	.096	少し	.100
改めて	.091	他	.100
考える	.088	学ぶ	.098

## IV. 考察

(1) 本校の授業実践と評価では、異学年による学外での保育・子育て支援活動により、授業や実習では学ぶことができない学生間の人間関係力が培われていることが示唆された。また、(2) 課外活動実践では、初めは戸惑いや難しさを感じるものの、実践を重ねるごとに、学生間での「連携・協働」への意識の高まりがみられた。

近年、出生率の低下に伴い少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化、さらに女性の社会進出による共働き家庭の増加等、子育て環境には様々な変化がうかがえる。そのため、子育てに対する不安や孤独感を抱く者も少なくなく、保育専門職に求められる責務は大きい。また、わが国では就学児童の保育所利用率は年々上昇傾向にあり、厚生労働省からは「保育士確保プラン」(厚生労働省, 2015) が発表されるほど、保育士の需要は高まってきている。しかし、保育士はストレスを受けやすく、要因の多くは職場の人間関係であり(齊木ほか, 2008)、特に新人保育士はストレス耐性力が低く、より負担を感じやすい(上村, 2011)。さらに、7割以上の保育士が職場を辞めたいと考えたとの報告もある(石川ほか, 2010)。また、保育士同士だけでなく、保護者とのコミュニケーションがうまくいかない要因として、保育者自体のスキルが低いことも指摘されている(丸山, 2014)。このように、保育士にとって人間関係は、離職に繋がる大きな要因であり、保育士養成校として、人間関係力は人材育成に非常に重要であると考えられる。

2017(平成29)年3月改定の保育所保育指針において、「職員が日々の保育実践を通じて、必要な知識及び技術の修得、維持及び向上を図るとともに、保育の課題等への共通理解や協働性を高め、保育所全体としての保育の質の向上を図っていくためには、日常的に職員同士が主体的に学び合う姿勢と環境が重要であり、職場内での研修の充実が図られなければならない」(厚生労働省, 2018)と、保育士の協働性が重視されている。さらに、近年の社会状況の変化により、子育てをする保護者の抱える課題は多様化している。その中でも、

保護者支援についても保育士に課せられた役割は大きく、期待も高い。しかし、学生は保護者と関わる経験が少なく、難しさを感じながら戸惑う姿が多くみられた。保育者養成校としてこれらの力を育むには課外活動に向けて、学生同士で作り上げる保育経験や保護者と接する機会の必要性を大いに感じた。

現在、コロナウイルス感染症拡大により、子どもと保護者の孤立や対面による保育実践の制限など、子育て支援を行う上で未だ厳しい状況が続いている。今後は養成校として、これらの経験を通して「連携・協働」することの大切さを実感するとともに、新しい保育・子育て支援の在り方を検討していきたい。

本論文の、「Ⅰ. 研究の背景・目的」「Ⅱ. 『連携・協働』する力を育む授業実践」は梶が、「Ⅲ. 「連携・協働」する力を育む課外活動」の分析は吉田、その他は中村が、「Ⅳ. 考察」は中村が担当した。

本稿は、日本保育養成教育学会第4回大会(2020)でポスター発表した原稿を加筆修正したものである。

## 文 献

- 石川洋子・井上清子(2010) 保育士のストレスに関する研究(1)ー職場のストレスとその解消ー。文教大学教育学部紀要, 44: 113-120
- 上村眞生(2011) 保育士のレジリエンスとメンタルヘルスの関連に関する研究ー保育士の経験年数による検討ー。広島大学大学院教育学研究科紀要(60): 249-257
- 加藤由美・安藤美華代(2019) 大学生の人間関係力育成に関する研究の動向と保育者養成教育への活用に向けて。岡山大学教師教育開発センター紀要(9): 337-350
- 経済産業省HP(2006)「3つの能力/12の能力要素」「人生100年時代に求められるスキル」(閲覧年月日 2020年12月29日)
- 厚生労働省(2010) 子育てビジョン～子どもの笑顔があふれる社会のために～。



- 厚生労働省（2015）保育士確保プラン.
- 厚生労働省（2018）保育所保育指針解説書.
- 齊木久代・中川香子（2008）保育職問題評価尺度作成の試みー保育職満足度，ストレス関連反応との関係ー. 保育士養成研究26：77-86
- 田口鉄久（2015）子育て支援活動「ぴよぴよ」による学び. 皇學館大学教育学部研究報告集（7）：63-85
- 民秋言（2017）幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携認定こども園教育・保育要領の成立と変遷. 萌文書林.
- デジタル大辞泉 <https://daijisen.jp/digital>
- 西川潔・堀田千絵（2019）教員・保育者を目指す大学生のジェネリック・スキルの特徴. 人間環境学研究17（2）：97-103
- 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版.
- 松山由美子（2008）保育者養成における「保育実践力」育成のためのカリキュラムの構成と評価. 四天王寺大学紀要（46）：233-253
- 丸目真弓（2014）「保護者支援の前提となる保育士と保護者間コミュニケーションに関する現状と課題ー保護者アンケートを中心としてー」大阪総合保育大学紀要（9）：173-194

## Examination of Practices to Foster Capacity for “Cooperation and Collaboration” in Early Childhood Education

NAKAMURA Mao, KAJI Miho, YOSHIDA Naoki

### Abstract

The purpose of this study was to consider the development of a capacity for “cooperation and collaboration” in early childhood education. Now, more than ever, having the ability to “cooperation and collaboration” is an essential skill for members of society, as well as a crucial force to improve the quality of professional workers, and should therefore be given priority at training schools. Accordingly, this study examined practices conducted in small-group seminars and in extracurricular activities. The results indicated that, in the seminar practices, the capacity for interpersonal relationships, which cannot be acquired through classroom learning and practical study, was fostered through team-based extracurricular activities in early childhood education and childcare support. Furthermore, in extracurricular practices, as students experienced more practice sessions, their awareness of “cooperation and collaboration” with their peers increased relative to the initial session. In the future, the training school intends to help students realize the importance of “cooperation and collaboration” through practices and extracurricular activities based on inter-class collaboration, while also considering new enhanced forms of early childhood education and childcare support.

**Keywords** : early childhood education, training for early childhood educators,  
cooperation and collaboration